

特集「地域医療を考える」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
消化器外科学

落 合 登志哉

新臨床研修制度開始以降、地域医療の崩壊がクローズアップとされ、原因が様々に取りざたされています。いわく、大学病院医局が少なくなった医局員を補うために地方から医師を引き上げた、そもそも研修医が都会志向であって、かついわゆる“きつい”科を選ばなくなったために地域が必要とする科の医師が減少した、地方自治体が大学医局からの医師派遣にのみに頼り、魅力ある地域環境を築いてこなかった等、どれも正解のようではありますがどうも正鵠を得ていないような気も致します。いずれにせよ原因は一つではなく、複合的な要因があるように思われます。

さて、本学の附属施設として京都北部地域医療の担い手として北部医療センターが発足して1年8ヶ月が経過しました。それ以前の京都府立与謝の海病院の時代から地域医療の中核であったことは間違いありませんがこれまでとは違う新たな試みが始まっています。本号の特集は「地域医療を考える」と題し、この地域医療に焦点を当てました。地域医療と言いますと市内でもいわゆる市中病院のホームページをみますと「〇〇地区の地域医療に貢献…」等の文言をみましますがここで取り上げる「地域医療」は元より医療資源の少ない地域、京都でいえば北部や過疎地域にて行われている医療に限定させていただきます。

本特集ではその地域医療で尽力されている5人の先生方に執筆を依頼させていただきました。まず本学、総合医学・医学教育学講座 山脇正永教授に地域医療の概論、特に京都府における地域医療について高齢化、地域コミュニティ、その教育の観点から解説いただきまし

た。また当院病院長 医療フロンティア展開学講座 中川正法教授には北部医療センターが行っている新たな試み・その目指すものについて論じていただきました。自治医大一期生で久美浜病院院長 赤木重典病院長には久美浜における長年の実践と改革について「連携」をキーワードに論じていただきました。本学出身で2014年に自治医科大学小児外科学教室教授に御就任された小野滋教授に地域医療における小児外科医療の位置づけについて論じていただきました。更に自治医大出身で本院総合診療科医師 横井大祐先生には地域医療に携わる中での医師としてのキャリア形成について論じていただきました。いずれもこれまでの経験・実践を踏まえた非常に力のこもった論文であり、地域医療とは今こうしてクローズアップされる以前から数々の問題を抱えており、それを一つ一つ解決していった過程が窺えます。また、地域医療は地域社会・行政と不可分であり、それぞれの地域に根ざした形が必要であることを痛感させられました。現在、地域医療は高齢者医療という問題をいち早くかかえ、更なる改革が迫られています。

先日、北部医療センターにおいて、宮城県涌谷町町民福祉センター長 青沼孝徳先生をお招きして【地域医療を考える集い】が開催されました。そこで語られた内容は地域包括医療・ケア（システム）であり、地域医療は単に病院医療だけでなく、保健、介護、福祉と一体になって行政と地域住民が一緒に健康を支えていく取り組みであり、その成果でした。更にこの包括医療・ケアを実践し、その地域に住み慣れた住民が安心して生活できるようにリードしていく

役割として、総合診療専門医を従来の専門医の一つに加え、これを育てることを強調されました。そこには涌谷町に対する愛情が溢れており、こうした郷土愛こそが医療を支える原点なのだなど大変感銘を受けました。

地域医療を考えることは今後の日本の医療を考えることだと思います。地域医療に尽力されている読者のみならず、全ての読者にとって本号の特集がそのヒントになることを期待しております。